正成伝説と「泣男」譚

－『理尽鈔』の「泣男」杉本佐兵衛を中心に －

李忠澔*
alphachino@hotmail.com

Contents

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．『太平記評判秘伝理尽鈔』と指導者としての楠正成像
Ⅲ．『理尽鈔』における「泣男」譚の生成過程
Ⅳ．「太平記評判」類における「泣男」譚
Ⅴ．　おわりに

Abstract

日本中世の南北朝時代を舞台にした軍記物語『太平記』は、近世初期においては『理尽鈔』を通して広く受容されていた。『理尽鈔』は『太平記』の描く合戦や人物などについて論評した書物で、当初は兵学者や大名といった武士階級の人々によって広く読まれていたが、その後次第に大衆のレベルでも講釈の一形態である「太平記読み」の形で受容されるようになる。この『理尽鈔』が理想的な為政者のモデルとしている人物が武将楠正成であり、正成とその一族に関する伝説は近世期を通して大衆に人気を博していた。

『理尽鈔』の正成伝説においては、『太平記』原典には見られない人物たちが登場して活躍を見せるが、本稿では『理尽鈔』が創り出した正成像の造形に関わる主要な人物の一人である「泣男」杉本佐兵衛に注目し、周辺人物の活躍が正成伝説に豊富な物語性を与えていく過程を、『理尽鈔』をはじめとする「太平記評判」を中心に考察する。

『理尽鈔』の「泣男」譚は、「泣く」能力など取るに足らないという理由で周囲の人々が「泣芸」を軽視する中で、どれほどつまらなく見える技能であっても必ず役に立つことがあると評価して「泣男」を登用した正成の人材登用術の妙を強調するエピソードの一つである。このように、楠正成に纏わる周辺人物の物語までも具体的に提示することで、英雄としての正成の活躍をより信憑性の伴ったものとして作り上げるのが『理尽鈔』の一つの特徴であるが、この「泣男」譚は以後の近世の文芸作品の中でも楠正成の享受に付随する形で受容されることになる。

楠正成という英雄の物語が語られていく中では、智仁勇三徳を兼備した英雄としての資質を裏付けるエピソードが必要となるが、『理尽鈔』は「泣男」譚という異伝・異説を設けること

＊ 東京大学大学院総合文化研究科博士課程、比較文学比較文化専攻。

교보문고 KYOBO Book Centre

で、『太平記』において律僧たちを利用して敵を欺いた智将としての正成像に、人材登用にも長けた指導者としての正成のイメージを肉付けすることができたのである。

Key Words : 太平記、楠正成、理尽鈔、太平記読み、泣男
(Taiheiki, Kusunoki, Masashige, Rijinsho, Taiheikiyomi, Na-kiotoko)

Ⅰ. はじめに

『太平記』における楠正成は、後醍醐天皇の夢告により初めて登場すると、智・仁・勇の三つの徳を兼ね備えた優れた武将として活躍し、その最期の場面となる「湊川の戦い」では、七度生まれ変わっても後醍醐天皇に仕えて朝敵を滅ぼそうと誓いを立てた忠臣として描かれる。このような伝説的な武将としての正成像は、その後近世期にも広く受容されていくが、その時に『太平記』本文と並んで大きな影響力を持っていたのが、『太平記評判秘伝理尽鈔』(以下『理尽鈔』)であった[1)]。

『理尽鈔』は、『太平記』の合戦や事件あるいは人物などについて政治や兵法の側面から論じた書物で、兵学者や大名たちにとっては為政者の心構えを学ぶためのテクストとして重要視された。また一方では「太平記読み」と呼ばれる講釈師たちの種本として用いられたことから、大衆のレベルでも広く受容されたと言われている[2)]。

『理尽鈔』は楠一族をめぐるエピソードのみならず、『太平記』には登場しない新しい人物までも創り出している。本稿で注目したいのは、『理尽鈔』が創りだした正成像の造形に関わる人物であるが、その代表格的な人物として「泣男」杉本佐兵衛を取り上げ、周辺人物の活躍が正成伝説に新たな物語性を与えていく過程

1) 『理尽鈔』の最大の特質は「楠中心主義」にあり、『理尽鈔』の正成関連記事は以降の正成伝説の広がりに大きく影響している。加美宏氏の先行研究によると、『理尽鈔』の「評伝」の記事の中でも、正成ら楠一族にかかわる合戦譚や治国譚が目立っており、『理尽鈔』が、いわゆる楠流兵法の基本兵書とされてきたという。加美宏(1985)「『太平記評判秘伝理尽鈔』をめぐって」加美宏著『太平記享受史論考』所収、桜楓社、pp.330。
2) 亀田純一郎(1931)「太平記読について」『国語と国文学』8 10、pp.233-236。

교보문고 KYOBO Book Centre

を考察したい。加美宏氏は「楠木正成と泣男―『太平記』享受史のひとこま」において、楠正成と「泣男」に関するエピソードは『理尽鈔』において『太平記』を補う形で最初に語られ、その後読物・絵本・浄瑠璃などの文芸ジャンルを通して、補完・拡張して来たと指摘している[3)]。

楠正成は、『理尽鈔』においては智謀と機略だけではなく政治・軍事を教論する理想的指導者として描かれるが、楠正成の指導者らしい面を表わすエピソードの一例が『理尽鈔』から始まった「泣男」杉本佐兵衛のエピソードである。「泣男」杉本佐兵衛は『太平記』には記述されていないが、『理尽鈔』から登場し、近世文学においては「泣男」譚単独ではなく、楠正成の享受に付随する形で発展して行く。そして、「泣男」の登用は正成の人材登用術の妙を強調するとともに、武士の範疇から離れていた低い身分から天皇の最側近まで登用された正成の出世の物語にも、戦乱という非常時における人材登用という面で繋がっている。特に、近世文学における「泣男」譚は、戦乱の中で一種の出世を成し遂げた「泣男」を周囲の人々が妬み、「泣芸」を認めないことから物語が展開する。

本論では、加美氏の先行研究を踏まえた上で、「泣男」杉本佐兵衛の物語が、『理尽鈔』が楠正成を理想的な為政者・指導者として表象するために取り上げられた具体例の一つであることを提示していきたい。

Ⅱ.『太平記評判秘伝理尽鈔』と指導者としての楠正成像

2.1『理尽鈔』の成立とその構成

まず、楠正成の「泣男」譚について検討する前に、この「泣男」譚が初めて登場する『理尽鈔』の成立過程とその構成について考察し、『理尽鈔』が楠正成の為政者・指導者としての側面に強く光を当てるようになった背景を明らかにしたい。

日本近世には『太平記』や『太平記』中の事件・合戦・人物などについて政道論・兵法論を述べた『理尽鈔』などを大衆の前で講釈する太平記読みが発生し、大

3) 加美宏(1992) 「楠木正成と泣男―『太平記』享受史のひとこま」『古典遺産』第42号、pp.285-292。

교보문고 KYOBO Book Centre

いに流行した[4)]。亀田純一郎氏によると、太平記講釈には、『理尽鈔』の講釈と単なる『太平記』講釈の二種類があった。理尽鈔講釈は『太平記』の本文を材料として政道論・兵法論等を詳述した大部の書、『理尽鈔』を所拠とする武士階級相手の講釈であり、慶長・元和の頃(1598～1624)から元禄宝永頃(1688～1711)若しくはそれ以後に及んでいる。太平記講釈は仕方話を以て『太平記』の内容を敷衍して語ることを本体としたと考えられる、民衆相手の講釈である。この両者の境界には必ずしも明瞭ではないところがあり、最近は両者を総称して太平記講釈と称する場合が多いとされている[5)]。

特に『理尽鈔』は、政道や兵法の秘伝書として、主として武士階層の間で講釈や伝授のために使用されたテクストであったが、17世紀に登場した出版業者の手に渡り、正保2年(1645)や寛文10年(1640)に、『太平記評判秘伝理尽鈔』という書名で刊行されたあたりからは、「秘伝書」的な色彩が薄まり、「評判書」として武士階層以外にも広く流布して、『太平記』そのものに匹敵する、大きな影響を世に及ぼすこととなった。『理尽鈔』以前にも『太平記鈔』『太平記賢愚鈔』などの『太平記』の註釈書が刊行されて『太平記』の普及に貢献し、『理尽鈔』以後にも『太平記大全』・『太平記評判私要無極鈔』・『太平記綱目』などといった『太平記』の評判が数多く刊行されたが、その中でも『理尽鈔』が最も広く読まれた。

『理尽鈔』の成立時期は、現在のところ正確には判明していない。刊本系奥書では、文明2年(1470)に今川駿河守心性入道が書写し、伝授を受けた名和肥後刑部左衛門に謹呈したとある。また、諸資料によると、本書はもと名和長俊の子孫正三が、元和8年(1622)の20年程前、大運院陽翁に伝え、元和8年頃、陽翁は唐津城主寺沢広高に伝授し、また寛永8年(1631)までには備前の医師和田養元家に伝授したようである。本書には刊本と写本があり、刊本の成立は現在の所付載される『恩地佐近太郎聞書』の刊年をもって、正保2年(1645)以前と推察されている[6)]。

---

4) 「太平記読み」は太平記講釈と太平記講釈をする専業者の両方を指す呼称であるが、太平記講釈の専業者を意味するものとしては、中世末期の天正17年(1589)5月以前に使用されている事例が報告されている。増田欣(1981)「太平記研究、現在の話題と将来像」『国文学解釈と鑑賞』591号、pp.167。

5) 前掲、「太平記読について」、pp.220-237。

교보문고 KYOBO Book Centre

『理尽鈔』の内容は『太平記』に描かれた事件・合戦・人物などにつき、「評云」として論評を行い、「伝云」として異伝をかかげるが、「評」と「伝」の分量は、ほぼ相半ばしている。「評」的な部分は『理尽鈔』の末尾に付載されている今川心性の奥書に、「右太平記評判者、武略之要術、治国之道也」とあり、同じく刊本等付載の大運院陽翁の奥書に、「夫評判者、謀敵権術、治国謀計也」とあるように、武略・兵法や治国・政道に関わる論評が多いのが特徴といえる[7]。若尾政希氏によると、この論評部分は、とくに楠正成の、地の利や人の和を最大限に生かしながら、策略・謀計を駆使した勝つための合理的戦法・兵法をくり返し称揚し、将たる者のあるべき道を説いたり、やはり正成を具体例として、為政者・支配者は、天道にのっとり、民を慈しみ、仁政を行うべきであるという、撫民・徳治の政治論を展開しているという[8]。とくにこれらの要素が、近世初期の武士層・支配層の人々の心をとらえていったものと思われる。

関ヶ原合戦(1600年)の後、家康が大名領国の大移動を行い、大名や上層武士らの支配層は、新たな領国の経営・撫民のために、政道の規範や理念を求めており、泰平の世が到来し、実戦から遠ざかることになった武士層の間では、兵法・軍略を理論化・体系化しようとする気運が盛んであった。『理尽鈔』の「評」的な部分は、こうした気運に合致するものであり、近世初期に、まず武士層に受容され広まったのは、このためであったと考えられる[9]。「伝」的な部分は、『太平記』の内容を敷衍しながら、『太平記』の後日譚のような内容も含んでおり、『理尽鈔』が江戸期の民衆に好まれて広く浸透することになったのも、この「伝」的な側面である。つまり、『理尽鈔』が『太平記』の正成関連エピソードについて異なる解釈をすることによって、新しい正成像が形成されることになり、そこには『太平記』とは一線を画する断絶も見えるが、近世の民衆に受け入れられたのは、『理尽鈔』独特の正成伝説の解釈というよりは、それに付随する異伝・異説であったと

6) 花田富士夫(2003)「近世初期の太平記読み」『仮名草子研究—説話とその周辺』所収、新典社、pp.420-421。
7) 加美宏(2002)「『太平記秘伝理尽鈔』とその意義・影響・研究史」今井正之助・加美宏・長坂成行校注『太平記秘伝理尽鈔』第一巻、平凡社、pp.377。
8) 若尾正希(1999)『「太平記読み」の時代』平凡社、pp.76-78。
9) 前掲、「『太平記秘伝理尽鈔』とその意義・影響・研究史」、pp.378。

교보문고 KYOBO Book Centre

言えよう。本稿で取り上げる「泣男」譚も、この『理尽鈔』の「伝」の語るエピソードの一つである。

2.2『理尽鈔』における指導者としての楠正成の面貌

それでは、このような『理尽鈔』の成立過程と構成上の特徴を踏まえた上で、『理尽鈔』における指導者・為政者としての楠正成の面貌について触れておきたい。

『理尽鈔』における指導者・為政者としての楠正成像について初めて言及したのは若尾正希氏である。同氏の研究は、従来の楠正成に関する研究が史的・社会史的な観点から楠正成の本来の姿を解明するか[10]、または歴史的存在の正成と物語の枠内における正成のイメージの延長線上で正成の実態とその意味に接近すること[11]に集中していたことに対して、近世初期における指導者としての楠正成像の形成について注目し、それには『理尽鈔』における楠正成像の変換が影響を及ぼしていることを明らかにしている[12]。

若尾氏が言及しているように、『理尽鈔』において正成は政治・軍事を教諭する理想的指導者として描かれているが、これは『太平記』の知謀・忠義の武将というイメージから、「知謀」の部分が近世初期の『太平記』享受者たちの必要に応じて強調・発展された結果であり、武将から為政者への転換を余儀なくされた近世初頭の領主層のあり方と足並みを合わせて、正成像も変貌することになったと言える。この若尾氏の研究は近世期に思想的、政治的理由で創り出された

10) 網野善彦氏は、南北朝の時代を天皇制存続の危機の時期と捉えて、天皇親政を目論んだ後醍醐天皇が宮廷に呼び寄せた異形の人物群と楠正成が緊密な関係にあったと仮定して、正成を中世の非人集団のリーダ格のものとして、これらの反討幕の動きの中で位置づけている。網野善彦(1995)「楠木正成に関する一、二の問題」『悪党と海賊-日本中世の社会と政治』所収、法政大学出版局。

11) 兵藤裕己氏は『太平記』の成立を源平交代史という物語の構造として把握し、このような権力闘争の主役である武士階級の範疇から外れた楠正成が『太平記』でヒーローとして活躍し、近世以降にも絶えずそのイメージが再生産されている点に注目している。兵藤裕己(1995)『太平記〈よみ〉の可能性-歴史という物語』講談社。

12) 若尾氏は民衆相手の太平記講釈が流行する以前に、大名や武士を相手とした太平記読みが先行し、近世初期に流行した「太平記読み」のテクストである『理尽鈔』のような太平記評判が世に出回ることになることから、『理尽鈔』から見えてくる為政者・指導者としての正成像に注目しながら、近世の大名たちによる正成顕彰について言及している。前掲、『「太平記読み」の時代』参照。

교보문고 KYOBO Book Centre

指導者的正成像という新たなイメージを提示した研究であると評価できる。

それでは、このような先行研究を参照しながら、『理尽鈔』の指導者・為政者としての楠正成のイメージについて具体例を挙げながら、検討してみよう。

まず、楠正成は撫民・徳治を行う指導者として登場するが、例えば、『理尽鈔』巻十六には農政に手腕を発揮する正成像が描かれている。

> ○伝云、古ヨリ和朝正成程智仁勇備タル男ナシ。先数箇所ノ新恩ヲ給ヒシニ侈ル事ナク、諸人ノ貧苦ヲスクイテコソトテ、前々ノ公納十ニシテ二ツヲユルス。賦斂以テ然也。加レ之摂津河内ノ両国ニテ所々ニ池ヲホラセテ新田ヲ余多仕テゲリ。百性仕居ルニハ、其田種作米ヲ積テ是ヲ調へ作人ヲ遣シ、其秋ニ至テハ一利ヲ加テ是を返納セヨト、翌年ニ至テハ出生米卅分ニシテ其一ツヲ取納ス。ソレヨリ三年然也。諸役ナシト謂程ニ諸国ヨリ百性正成ガ国ニ来テ両国ノ人民ヲ増スル事、日比ニ半倍セリトニヤ。其外樹ナキ山ヲバ何ニカハセントテ、皆樹ヲソダテ、諸木中ニ柳程早生長スル物ナシトテ、嶺谷ニ柳ヲ種タリ。又所々ニ栗ヲウヱ村里ニハ桑ヲヒシトウヘテ、下民ニ与シ地ヲ徒ニ置事政ニアラズトテ皆如レ是。[13]

ここで正成は領民の貧苦を救うために減税を実施する一方、支配下の摂津河内の両国において新田開発や用水の整備、種米貸与、植樹の実施など、百姓のための農業政策の実施に力を入れている。また、それに加えて、諸役免除などの善政を行っており、諸国の百姓が正成の領国に流入するなど、正成の徳治は周辺地域にも知られていたという[14]。

このような楠正成の撫民政治は、文武両道を奨励する百姓への教育にも確認できる。『理尽鈔』巻八には、

> サレバ①楠正成ハ幼少ノ家子郎等ヲ集テハ、夏ハ河狩ト号シテ、ヒヤウタン余多求メ出シ、是ヲ童子ノセナカニ結付テ、水中ニ入テ、水ニタハフレシメ、

13) 和田助則(評)『太平記評判秘伝理尽鈔』40巻44冊、文明2年〈1470〉跋、東京大学総合図書館蔵、巻16, 77ウ-78オ。

14) 前掲、『「太平記読み」の時代』、p.88。

교보문고 KYOBO Book Centre

或ハ十歳余リヨリハ、山野ニ出テ、歩行ヲ令レ習、中ニ勝レタルニハ老若ニ不レ依、引出物ヲ得サセシト也。②或ハ太刀打、長刀、早業ヲ令レ習、又弓馬等、是ヲ遊ト号ス。学ニハ道ヲ令レ知、七書四書等ノ類ヒ、夜々ノ文談ナリ。仮ニモ道ニ不レ当遊、無道ノ物語ナド好ム者ヲバ、善トセズ。是ヲニラマヘ、道ノ道タル理ヲ謂フ者ヲ好ムニハ、禄ヲ与ヘテ、是トセシト也。上ガ好ム所ナレバ、下々皆如レ是ニヤ。人ニ主タラン者不レ嗜乎。15)

といい、ここでは正成が百姓の教育のために、様々な工夫をしていることがわかる。まず、傍線部①のように、正成を童子の水泳教育に瓢箪を利用し、また、歩行の訓練では優秀な者へ賞品を与えて意欲を引き出す工夫をするなど、普段から戦闘には欠かせない水泳と歩行の能力を養うために、様々な方法を考案していた。そして、傍線部②で示しているように、正成は武道と文道の両道を兼備することを奨励し、百姓の道徳教育にも力を入れていた。このような正成の姿はまさに理想的な仁君として、為政者・指導者のモデルになっている。

このように、貧人救済、農民保護、戦闘能力の養成、文武両道の兼備に力を入れていた楠正成の政策から、近世初期の大名や武士階級の人々は、指導者・為政者としての心構えを読み取っていたと考えられる。

また、正成は人材掌握にも長けていた。論功行賞に対する正成の考え方やそれによる人材掌握の能力は、『理尽鈔』を受容した指導者たちにとって良い参考例となったと考えられる。

『理尽鈔』巻七の「千剣破城軍事」の「伝」の記事には、

○伝云、楠存ル子細有テ、其日ハ音モセズ、城ノ内シヅマリカヘツテゾ居タリケル。其故ハ楠城ニカヘツテ各ノ高名共ヲ其将ニ謂セテ、少モ人ニ勝レテアリシヲバ、是ヲ賞シ、分々ノ引出物ナドシテ云。何モ如レ申各人ニ勝タル分野実ニ神妙ニ候。サリナガラ各ノ高名斗ニモ非ズ。諸卒ノ何レモ命ヲ不レ惜敵陣ニ懸入レ候ニ依テナリ。然レバ六十九人ノ高名ハ、惣ジテハ三百人ノ高名、別シテハ六十九人ノ高名ニ侍ル。三百人ノ高名ハ、三人ノ将ノ

15) 前掲、『太平記評判秘伝理尽鈔』巻8、34ウ-35オ。

교보문고 KYOBO Book Centre

覚悟ニゾトテ、一番ニ大将ヲ呼出シテ諸人ノ中ニシテ高名ノ次第ヲ問、ソノ身ニモ語ラセテ、是ヲ感ジテ分々ニ 随 テ白銀并銭貨ヲ引ク。又蔵ノ内木綿布綿ナドヲ取出デ、 裏 表 ヲ添テゾ引タリケル。16)

と、各々の能力と功績に応じて公明正大な論功行賞を行うことによって、部下の信頼を獲得する正成の姿が描かれている。特に、傍線部が示しているように、少しでも優れている所があれば、それに相応しい待遇を提供するという、平等で合理的な方法は人々の心をつかむ指導者の徳目の一つである。

以上で見たように、『理尽鈔』には『太平記』には見えなかった、為政者・指導者としての楠正成が描かれており、本論で扱う「泣男」譚の場合も、このような指導者・為政者としての楠正成のイメージの中でも、特に人材登用の妙を強調したエピソードの一つであるといえる。

Ⅲ.『理尽鈔』における「泣男」譚の生成過程

3.1『太平記』の原典における「泣男」譚の原形

それでは、『理尽鈔』の「泣男」譚を検討する前に、『太平記』原典において「泣男」譚の原形になったエピソードについて考察してみよう。

『太平記』巻十五「将軍都落事付薬師丸帰京事」の章段には、楠正成の計略の一つととして、「歎く」ことを得意とする部下を利用して足利尊氏を欺くという逸話が描かれている。この章段で、楠正成は律僧二十三人を京に送り、この律僧らは戦場で泣きながら死骸を探す17)。これを怪しんだ京勢が事情を聞くと、

16) 前掲、『太平記評判秘伝理尽鈔』巻7、36オ-36ウ。

17) 後醍醐天皇による正成登用には何らかの形で律僧たちが関わっていた可能性が高いと言われているなど、楠正成は律僧たちと深いかかわりを持っていた。楠正成と律僧との関わりについては、正成を後醍醐天皇に仲介した人物として、文観の役割に注目している黒板勝美氏(「後醍醐天皇と文観僧上」『虚心文集』第2、吉川弘文館、1939)、真言僧になる以前の文観の経歴や後醍醐天皇の王権との関わりまで論じた網野善彦氏(『異形の王権』、平凡社、1986)、文観が西大寺系の律僧として活動していたと考証した岡見正雄氏(『太平記(2)』補注、角川文庫、1982)、文観

교보문고 KYOBO Book Centre

昨日の合戦で死んだ新田義貞・北畠顕家・楠正成らの亡骸を孝養のために探している、と答える。京勢は初め、「アナ不思議ヤ、宗徒ノ敵共ガ皆一度ニ被レ討タリケル。サテハ勝軍ヲバシナガラ官軍京ヲバ引タリケル。何クニカ其頸共ノ有ラン。取テ獄門ニ懸、大路ヲ渡セ。」[18]と言って、その首を探したが見つからなかったのでこれを疑うが、その面影の似た首を二つ獄門の木に懸けて、新田左兵衛督義貞・楠河内判官正成と書き付けたものを、その札の側に、「是ハニタ頸也。マサシゲニモ書ケル虚事哉。」[19]と、書添えて見せた。

同日の夜、京勢は楠正成の部下たちが松明を燃やしながら小原・鞍馬の方へ下る様子を見て、大将を討たれた故の退却準備であると考え、この機に楠の軍勢を壊滅すべく、鞍馬路へは三千余騎、小原口へ五千余騎、勢多へ一万余騎、宇治へ三千余騎、嵯峨・仁和寺の方面へ千騎・二千騎を差し分けて出陣するが、これを利用して楠正成は逆に手薄になった京勢の陣を狙い、二十九日の卯の刻に、二条河原へ押し寄せて、方々に火をかけ、京勢は退却する。

この章段でポイントになるのは、「歎く」ことで、敵を欺くという巧妙な戦略である。しかし、ここで楠正成が京勢を欺く計略を立てて律僧たちを送り込み、彼等が歎くという場面は描かれてはいるが、その前後の具体的な状況は記述されていない。また、その律僧たちは特段泣くことを特技としている訳ではない。ただ、最初に「楠判官山門ヘ帰テ、翌ノ朝律僧ヲ二三十人作リ立て京ヘ下シ、此彼ノ戦場ニシテ、尸骸ヲゾ求サセケル。」[20]と記述されているだけで、楠正成がどのような経緯でこの律僧たちを戦場に送ることになったかは明らかにされていないと言える。そして、律僧たちが戦場で取った行動というのは、悲しく歎きながら昨日の合戦で死んだ新田義貞・北畠顕家・楠正成らの亡骸を孝養のためにさがしていると答えるということだけである。

が後醍醐天皇の倒幕計画に密接にかかわっており、律僧たちは後醍醐と「あやしき民」を繋げる役割もしていたという兵藤裕己氏(前掲、『太平記〈よみ〉の可能性 ― 歴史という物語』)の説がある。

18) 後藤丹治・釜田喜三郎校注(1960)『太平記』『日本古典文学大系』第35巻、岩波書店、pp.111-112.

19) 前掲、『太平記』、pp.112。

20) 前掲、『太平記』、pp.112。

교보문고 KYOBO Book Centre

3.2『理尽鈔』の「泣男」譚

上述のような『太平記』のエピソードに対して、『理尽鈔』はこの戦場に律僧達が送られるまでの状況をより具体的に説明している。前述したように、『理尽鈔』は「伝云」の形で『太平記』の事件・人物について内容をより敷衍した形で説明するという特徴を持つが、この章段については『太平記』本文と比べるとかなり長い部分を「歎男」杉本佐兵衛の登場から彼を戦場に送り込むまでの経緯の具体的描写に割り当てているのである。『理尽鈔』に登場する杉本佐兵衛は自由自在に泣く技術を理由に正成に登用され、その後、正成の作戦の実行に有効な働きをするという形で描かれる人物である。

「泣男」杉本佐兵衛は『理尽鈔』をはじめとした太平記評判では、「歎男」として表記され、「なきおとこ」と読まれていた。それが後の通俗軍書からは「泣男」と表記されるようになっている。『理尽鈔』などの太平記評判では、「歎男」と表記して「ナキヲトコ」と読んでおり、『太平記年表』には、「歎男」は「哭者(哭する者)」と表記されている。これに対して、通俗軍書の『南朝太平記』(馬場信意作、宝永6年<1709>刊)では、「空泣」をよくする者として記述されており、特に周囲の人々を巻き込んで泣かせることに焦点が置かれ、死者を弔う「歎男」のイメージは、「空泣」によって周囲の涙を誘うことのできる「泣男」へと変換される。即ち、杉本佐兵衛の行動は、戦場で討死した大将たちを弔う場面で死者を悼んで悲嘆する「歎く」から、通俗軍書では場面を選ばずに声をあげ、また涙を流す「泣く」という行為へと拡大されているのである。

このように、「泣男」譚は『理尽鈔』以降もさらにイメージの変容を伴っていくことになるのだが、ここではその原点とも言える『理尽鈔』における杉本左兵衛をめぐるエピソードの内容を検討する。杉本佐兵衛は千破剣の楠正成のもとに、家来の松原の五郎なる人物によって扶助として連れて来られる。この杉本佐兵衛に対して正成は何か芸があるのかを問うと、松原はただ「歎く」ことに長けていると答える。楠が更に尋ねると、この杉本佐兵衛は何時でも涙を流して自由に歎くことができるという。正成はこの杉本の特技に「ソレコソ世ニ希(マ)レナル、左様(サヤウ)ノ事モ入ル事ナリ」[21]と興味を持ち、直に対面して歎くよう要求する

교보문고 KYOBO Book Centre

と、「歎男」は即座にその場でだくだくと涙を流して歎く。これを見た正成は実に珍しいことであると感嘆し、「歎男」を手下に置くことにする。このように、楠正成は杉本佐兵衛の「歎く」芸を立派な一つの芸として認める。しかし、周囲の人々は皆「歎く」のは取るに足らない芸だとあざ笑い、加えて「歎男」は周囲の人間まで歎かせることができるというので不吉だと言う。このような周囲の反応にも関わらず、正成は「何事ニテモ侍(ハンベ)レ、人ニ勝(スグ)レタル事仕ンハ皆芸(ミナゲイ)ナリ。必用(カナラズ)ノ事在ラン。其盲聾(モウレウ)ノ人ヲサヘ、分(ブン)ニ随(シタガツ)テ世ノ用事ヲナス。況人ニ勝(スグ)レタル芸(ゲイ)ヲ持(モタ)ンヲヤ」[22]と言い、周囲の反対を押して「歎男」を召し抱えることにする。ここで正成が周囲の人々とは対照的な反応を示して「歎男」を召し抱え、それがこの後の「歎男」の活躍へと繋がっていく一連の流れは、楠正成の卓越した人材登用を鮮やかに映し出すことになり、それによって正成の指導者としての優秀性が強調されることになる。

先にも述べたように、若尾政希氏によると、『理尽鈔』の一つの特徴は楠正成を為政者・指導者として描いているということである。即ち、『理尽鈔』では、正成の合戦・謀略が、異伝・裏話をまじえながらより詳細に語られるとともに、『太平記』には見られない正成の合戦譚も数多く盛り込まれている。加えて『理尽鈔』では、『太平記』中の諸武将の合戦を取り上げ、合戦の是非なり武将の能力なりを厳しく論評しているのであるが、多くの場合、正成はその論評の対象外に置かれる。というよりむしろ、正成の合戦や言動を引き合いに出して、いわば正成を価値判断の基準にして諸将を厳しく論評しているのである[23]。したがって、ここで取り上げる「歎男」杉本佐兵衛に対する正成の態度も『太平記』で描かれた忠臣・軍略家の面としての正成像より、為政者ないしは指導者としての正成の面貌を際立たせるために設けたエピソードであると言えるだろう。

『太平記』と同様に『理尽鈔』でも正成は智謀ある軍略家である。しかし、このように『理尽鈔』での正成はただ智謀ある軍略家を超える面貌を持っている。「歎男」杉本佐兵衛の「泣芸」を認める場面もただ軍略家としての智謀というよりは、

21) 前掲、『太平記評判秘伝理尽鈔』巻15、31ウ。
22) 前掲、『太平記評判秘伝理尽鈔』巻15、32オ～32ウ。
23) 前掲、『「太平記読み」の時代-近世政治思想史の構想』、pp.82-83。

교보문고 KYOBO Book Centre

何でも人より秀でることがあれば、それがどんなに取るに足らないように見えるものであれ、有用に使える時があるという信念に基づいて行動するリーダーとしての正成を描いている。

この「歎男」杉本佐兵衛は、『太平記』本文で登場した律僧たちと共に登場する。「歎男」杉本佐兵衛が陣営に来たその晩、正成は義貞に「歎男」杉本佐兵衛を利用した機略を持ちかける。その内容は、杉本佐兵衛と僧達を戦場に派遣し、正成の死骸を探しに来たと嘘をつき、京勢を騙すというものであった。ここで、正成は杉本佐兵衛の身なりを律僧に装って他の律僧たちに紛れさせることによって、『太平記』本文の律僧たちが登場する場面に新しく「歎男」が登場したストーリーが自然に結合しているのである。即ち、『太平記』本文では、律僧たちだけが戦場に送られるが、『理尽鈔』では、律僧たちは「歎男」杉本佐兵衛の「泣芸」をより効果的に見せる補助的な役割を担う存在として登場しており、『理尽鈔』の伝文における「歎男」の登場は、『太平記』の原文を十分に意識してのものであることがわかる。

また、『理尽鈔』ではこの律僧たちの登場場面においても一つ工夫を凝らしている。正成は「歎男」杉本佐兵衛を戦場に送るに先立って、律僧の作法を「歎男」に身に付けさせるよう、近くの里の律僧に依頼するが、この律僧は戒法に背くという理由で拒否したところ計略の漏洩を恐れた正成に監禁されてしまう。そして、正成は別に和爾の辺りにいる律家に矢尾別当(八尾別当顕家)を遣わして依頼し、杉本佐兵衛は弟子として受け入れられる。このように、『太平記』では「歎男」杉本佐兵衛の登場無しに単独で戦場で歎いた律僧たちは、『理尽鈔』では「歎男」の「泣芸」をより効果的にするための補助的な役割を果たしており、その経緯も詳細に説明されている。例えば、初めに杉本の弟子入りを拒否した律僧を機密保持のために即監禁する正成の行動は、緻密な計略家としての側面が窺える場面でもある。

『理尽鈔』では、正成は「歎男」杉本佐兵衛に「泣芸」を利用した計略を説明しながら、「歎男」に計略が成功すれば所領を与えることを約束する。

諸大将達(タチ)ニモ此由(ヨシ)ヲ談(ダン)ジテ宿所(シユクシヨ)ニカヘリ、歎男(ナキヲトコ)ニ此事申聞(キカ)セ、「此謀成ナバ、汝(ナンヂ)

교보문고 KYOBO Book Centre

ヲハ所領(ショレウ)一所ノ主トナスベシ」ト也。24)

このように出世のために功を立てるということは今後の太平記物の内容において一つの重要な要素になっていく。それは、当初正成が「歎男」の「泣芸」を認め、召し抱えることにした時、周囲の人々が反対したのは「泣芸」を軽蔑したこともあるが、それよりも「泣く」という大したことの無い芸に所領を与えた正成の決定に納得しなかったのである。このような、「泣芸」に対しての軽蔑と所領給与に対する反発は、今後の太平記物における「歎男」譚の一つのテーマになっていく。

以上で見たように、『理尽鈔』は『太平記』本文にはない「歎男」を登場させ、エピソードの内容を増幅させている。この『理尽鈔』の「伝」は、基本的には、『太平記』の正成智謀譚をうけて、それを詳細且つ具体的に敷衍したものという側面を持っているが、「歎男」杉本佐兵衛を登場させたという一点において、『太平記』の原話からの大きな乖離が認められる。つまり『理尽鈔』以降近世文学の中に登場することになる「歎男」譚の原型は、この『理尽鈔』の「伝」にあると言えるのである。このように、『太平記』では、律僧たちを利用して京勢を欺くのが、『理尽鈔』においては話が拡張され、「歎男」杉本佐兵衛が登場し、律僧の弟子を装って京勢を欺く役割を正成から託される。そして、そこにはただエピソードの追加が成されるだけではなく、『理尽鈔』ならではの狙いが込められていたのである。まず、杉本佐兵衛を登場させることにより、無名の男を一芸に秀でているという理由で登用するという正成の大胆な人材登用を描き、さらにその杉本佐兵衛が正成の練った緻密な作戦のもと、みずからの芸を活かして見事に足利勢を欺くというストーリーが完成し、優秀な指導力と智略をもって戦局を乗り切る正成像がより際立つ結果となるのである。

3.3『理尽鈔』以前の「泣芸」をモチーフにした物語

このような『理尽鈔』の「歎男」譚は何に由来するのだろうか。管見の限りでは杉本佐兵衛に関わる直接的な記録やエピソードの類は見つかっていない。した

24) 前掲、『太平記評判秘伝理尽鈔』巻15、33ウ。

교보문고 KYOBO Book Centre

がって、この「歎男」譚が『理尽鈔』による完全な創作であるのか、あるいは事実に即した記述であるのかについては、今後検討を必要とする。但し、『理尽鈔』が刊行される以前にも「泣芸」を利用した物語は流布していた。例えば、狂言の「泣尼(なきあま)」では住持が自分の説法の際に「泣事」が上手な尼を利用する。その内容は、住持が隣村の男に説法を頼まれるが、説法が下手なため、説法の際によく泣く「泣尼」と呼ばれている尼を連れて行く。住持が孝子説話を織り交ぜて説法を始めるが、尼は居眠りし、咳払いしても起きない。ところが、終えて帰ると尼が追ってきて報酬を要求したため住持は尼を打ち倒して逃げ込むという内容である。ここでは、「泣く」事を特技とする者を利用して、説法の効果を高めようとした試みだったが、失敗に終わってしまう。

また、『古今著聞集(ここんちょもんじゅう)』巻一六の「或る僧説法の導師と成り窃に約して尼公を泣かしむる事」にも、説法僧が泣尼を雇う話が記されている。その内容は狂言「泣尼」とほぼ同様で、ここでは尼が説法の前に別の理由で泣き出してしまう。

また、中国の説話にも取るに足りない技能を持つ部下が優秀な主君のもとでその技術を活かして主君を助けるという例が存在する。それは『十八史略』[25]などで知られる「鶏鳴狗盗」という故事で、中国の戦国時代、斉の孟嘗君が狗のように物を盗む者や鶏の鳴きまねの上手なものを食客としていたおかげで難を逃れたという内容である。これが意味するのは、物真似やこそどろのようなくだらない技能の持主を意味することで、転じて、取るに足りない技能でも役に立つことがあるたとえである。これは正成が「歎男」杉本佐兵衛の「泣芸」を、周囲の人々がくだらないと軽蔑するにも関わらず、認めたことと相通じると言えよう。また、『太平記』巻三十四「畠山道誓上洛事」にも孟嘗君の名前が見え、『太平記』より以前に成立した『平家物語』巻三にも「鶏鳴狗盗」の故事が引用されていることから、一芸に秀でた者を優秀な主君が登用するという、モチーフは『理尽鈔』が記される以前から既に広く知られていたと思われる。したがって、『理尽鈔』における

25) 元の曾先之著。13世紀後半、元初期の成立。竹内弘行氏によると、『十八史略』は、日本では南北朝から室町初期ころに、おそらく二巻本が先に、遅れて七巻本が伝来したと思われるが、室町中期には禅寺の「五山」にて七巻本が復刻されて流布した。これを「五山版」といい、以降、日本では何度もこの七巻本が刊行されたという。竹内弘行(1989)『十八史略』『鑑賞中国の古典』第8巻、角川書店、p.30。

교보문고 KYOBO Book Centre

「歎男」杉本佐兵衛譚の形成にもこうした先行する説話類が影響を与えていることは十分考えられるだろう。

Ⅳ.「太平記評判」類における「泣男」譚

さて、『理尽鈔』に前後して刊行された他の太平記評判においても「歎男」譚は記述されている。それには二つの傾向があり、『太平記』に即したものと『理尽鈔』に即したものに別れる。まず、『太平記鈔』[26]『太平記賢愚鈔』[27]など『理尽鈔』以前に刊行された『太平記』の註釈書には「歎男」譚は見当たらない。そして、『理尽鈔』より後の時代に刊行された『太平記評判私要理尽無極鈔』[28](以下『無極鈔』)と『参考太平記』第十五巻「尊氏都落附薬師丸帰京事」にも「歎男」杉本佐兵衛は登場していない。一方、『太平記大全』[29]と『太平記綱目』には、「歎男」杉本佐兵衛が登場しているから、『理尽鈔』が「歎男」譚が記述された最初の太平記評判

26) 『太平記鈔』は、古活字版『太平記』の難語・人名・地名等に音義を注した『太平記音義』とあわせて、十冊本の古活字版として、慶長15年(1610)刊本をはじめ、慶長～寛永期(1596～1644)期に刊行された数種の版が行われている。その成立については確証はないが、慶長15年の述作とみなされている。その著者については、要法寺版の刊行で知られる京都要法寺の学僧世雄日性の著作という説が行われている。加美宏著(1997)『太平記の受容と変容』翰林書房、p.127。

27) 『太平記賢愚鈔』は、『太平記』中の要語・難語につき、和漢の出典を挙げて注解を加えようとしている点において、学問的な注釈の端緒を切り開いたものであるが、未定稿的な形態を残したままであるといった、本格的な注釈書としては、不備な面を持つものであることも否定できなかった。『賢愚鈔』の注釈の大部分は、『太平記』の当該本文を見出し語として掲出せず、いきなり典拠の文章などを記しているのであるから、一見しても、その注解が、どの語句の注釈であるのか、わからないという、注釈書として致命的ともいえる不便さを抱えるものである。前掲、『太平記の受容と変容』、p.126。

28) 『太平記評判仕要理尽無極鈔』は、江戸期の版本(無刊記)を見ると、外題は、みな『太平記評判』となっており、内閣文庫蔵四十五冊によって示すと、内題も、『太平記評判仕要理尽無極鈔』となっているのは、巻一(上・中・下)のみで、巻二(上・中・下)は、『太平記評判無極鈔』となり、巻三以下は、『太平記評判理尽鈔』となっている。全巻の構成は、『太平記』流布本と同じく四十巻であるが、巻十七と巻二十七とをそれぞれ上下二巻(二冊)、巻三十五を本来二冊に分けているため、本文部分は計四十三冊、それに巻頭に総目録一冊、巻末に「恩地左近太郎聞書」なる一冊を付して、総計四十五冊となっている。前掲、「『太平記評判秘伝理尽鈔』をめぐって」、p.318。

29) 『太平記大全』は、西道智の編著にかかり、万治2年(1659)5月に板行されている。前掲、『太平記の受容と変容』、p.152。

교보문고 KYOBO Book Centre

であると言えるだろう。

元禄4年(1691)に徳川光圀が『大日本史』の編纂を行うにあたって、修史の助けとするために刊行した『参考太平記』[30]は、『太平記』の最初の本格的研究書で、記録性・事実性を第一に考えたために、呉越軍のこと、干将莫耶のことなどの中国故事は省かれているとともに、第十五巻「尊氏都落附薬師丸帰京事」においても『理尽鈔』の「歎男」譚は参照されておらず、ただ『太平記』の内容とほぼ同じ記述をしている。これは、『参考太平記』の「凡例」において、「太平記評判、大全等、並不レ足レ論。故不レ取。(太平記評判、大全等、並びて論ずるに足らず。故に取らず。)」[31]として、斥けたこともあって、近世において『理尽鈔』が研究的に取上げられることはなかったことを示している。

『無極鈔』は編者・成立時期については不明で、『理尽鈔』の存在に刺戟をうけた同類の作であるが、楠正成の風貌を描写するにおいて『理尽鈔』とは違う描写をするなど相違点があると言われている[32]。ただし『理尽鈔』とは異なり、「歎男」杉本佐兵衛譚に関する記述は存在しない。

『太平記大全』は万治2年(1659)刊行の絵入整版本であるが、『太平記』の原文と『太平記鈔』と『理尽鈔』とをあわせたものである。即ち、流布本系一本によって『太平記』の本文を掲出し、次いで『太平記鈔』による註釈を掲げ、さらに『理尽鈔』の「評」や「伝」を載せている[33]。また一部に『太平記理尽図経』の記事や絵図も引く。こうした集成のほかに、著者独自の注解として、主要な登場人物の略伝を記した「伝記」という項目が加えられている。巻十五「将軍都落事付薬師丸帰京事」においても同じような方法を取っており、『理尽鈔』の内容と同様に「歎男」譚を載せているが、「伝記」の部分に「歎男」に関する記事は記述されていない。

このように『太平記大全』が『太平記』・『太平記鈔』・『太平記評判秘伝理尽鈔』をそのまま採録したことに対して、『太平記綱目』は近世初期に相次いで著わされた『太平記』の評判書・註釈書の類を集大成することを大きな目的とした著作

30) 今井弘済・内藤貞顕考訂 元禄4年(1691)、『参考太平記』40巻40冊、東京大学総合図書館蔵。
31) 前掲、『参考太平記』「凡例」、2オ。
32) 前掲、『太平記の受容と変容』、pp.300-305。
33) 前掲、『太平記の受容と変容』、pp.152-154。

교보문고 KYOBO Book Centre

である。『太平記綱目』は『太平記大全』に対して、『太平記鈔』のほかに『太平記賢愚鈔』の註釈も参照し、『理尽鈔』とともに、もう一つの評判書『無極鈔』の「評」「伝」をあわせ収め、『太平記理尽図経』のほかに、『太平記大全』の「伝記」をも採るなど、集成書としての幅を広げた。また、そうした先行書の集成ばかりでなく、「追解」という項目には、編者の筆になる新たな注解も見られ、「通考」として、『太平記』の合戦・事件・人物についての著者独自の見解・批評を加えるなど、『大全』とは異なる特色を打ち出している。その上、『太平記大全』が、『太平記鈔』の註釈や『理尽鈔』の「評」「伝」などに手を加えず、そのまま収載しているのに対し、『綱目』は、註釈書・評判書の記事に、取捨やアレンジを加え、書き直した形で集成しようとしている点にも、編者の工夫が見られると言われるが、「歎男」譚においては、『理尽鈔』とほぼ一致する。

以上見てきたように、太平記評判の中では『理尽鈔』の「歎男」譚をそのまま借用したものと、『理尽鈔』とは別途に『太平記』本文の内容をそのまま引用したものがあった。『理尽鈔』の「歎男」譚は杉本佐兵衛という具体的な人名を挙げることや杉本佐兵衛の登場と戦場まで辿り付く成り行き、また戦場での詳細な行動などを詳らかに叙述することによって、『太平記』本文の内容を補い、具体化する傾向が見える。これは、前述したように『理尽鈔』の「伝」の部分の一つの特徴とも言えることであり、他の太平記評判も『理尽鈔』のこのような特徴を受け継いだと言えよう。

Ⅴ. おわりに

本稿では『太平記』の原文には存在せず、『理尽鈔』から初めて登場する「泣男」譚について、「太平記評判」類を中心にその生成と展開の過程の一端を検討してみた。

太平記講釈のテクストの一種である『理尽鈔』が江戸期の民衆の好みに応じて、広く深く浸透することになった理由は、その「伝」的な側面であった。『理尽

교보문고 KYOBO Book Centre

鈔』の「伝」は、『太平記』の内容を敷衍しながら、『太平記』後日譚のような内容までも含んでおり、その一例として、『太平記』の原文には登場していない「泣男」杉本佐兵衛の活躍が補われていることを挙げることができる。このような挿話的なエピソードが付け足されることにより、正成伝説には新たなバリエーションが生まれ、より豊富な物語性を備え持つことになる。『理尽鈔』の「泣男」譚が果たした役割は、正成の人材登用術の妙を強調することであり、これは『理尽鈔』以後の楠正成の享受に付随する形で受容されるが、その際にはそのままの形にとどまらず、「笑男」や「泣女」など多様な形に変容することになる。

近世期における楠正成像は国家に対する忠臣という絶対的なイメージに留まらない重層性を備えており、特に文芸ジャンルにおいては通俗軍書、歌舞伎や浄瑠璃、仮名草子、浮世草子や読本、草双紙などの各ジャンルの特徴に合わせて、忠臣や智略家、孝子、太鼓持など多様な姿で描かれ、近世文学の一つのアイコンとして定着することになるが、「泣男」譚はこのような『理尽鈔』以後の正成伝説を題材にした作品の構成にも影響を及ぼすことになる。特に、「泣男」譚が『理尽鈔』に最初に登場するという事実は、『理尽鈔』をはじめ「太平記読み」とそのテクストである太平記評判類が、近世文学における『太平記』の受容に及ぼした影響を、具体的な実例を通して読み解く糸口にもなる。

しかし、一方で「泣男」杉本佐兵衛譚は、『太平記』受容の中でも楠正成享受の一部に過ぎず、楠正成をはじめとして『太平記』の内容は様々な文学ジャンルに渡って影響を及ぼしたことは言うまでも無いことから、その多様な広がりを究明していくことは今後の課題としたい。

참고문헌

網野善彦(1986)『異形の王権』平凡社。

_____(1995)「楠木正成に関する一、二の問題」『悪党と海賊 ― 日本中世の社会と政治』所収 法政大学出版局。

岡見正雄(1982)『太平記(2)』補注 角川文庫。

今井弘済・内藤貞顕考訂(元禄4年<1691>)『参考太平記』40巻40冊 東京大学総合図書館蔵。

加美宏(1985)「『太平記評判秘伝理尽鈔』をめぐって」加美宏著『太平記享受史論考』所収 桜

교보문고 KYOBO Book Centre

楓社 p.316、p.330.(初出『日本文学』第343号日本文学協会 1982)。
_____(1992)「楠木正成と泣男―『太平記』享受史のひとこま」『古典遺産』第42号、pp.285-292。
_____(1997)『太平記の受容と変容』翰林書房、p.127。
_____(2002)「『太平記秘伝理尽鈔』とその意義・影響・研究史」今井正之助・加美宏・長坂成行校注『太平記秘伝理尽鈔』第一巻 平凡社 p.377。
亀田純一郎(1931)「太平記読について」『国語と国文学』8 10、pp.233-236。
黒板勝美(1939)「後醍醐天皇と文観僧上」『虚心文集』第2 吉川弘文館。
後藤丹治・釜田喜三郎校注(1960)『太平記』『日本古典文学大系』第35巻 岩波書店、pp.111-112。
竹内弘行(1989)『十八史略』『鑑賞中国の古典』第8巻 角川書店、p.30。
花田富士夫(2003)「近世初期の太平記読み」『仮名草子研究―説話とその周辺』所収 新典社、pp.420-421。
兵藤裕己(1995)『太平記〈よみ〉の可能性 ― 歴史という物語』講談社。
増田欣(1981)「太平記研究、現在の話題と将来像」『国文学解釈と鑑賞』591号、p.167。
若尾正希(1999)『「太平記読み」の時代』平凡社、pp.76-78。
和田助則評(文明2年<1470>跋)『太平記評判秘伝理尽鈔』40巻44冊、東京大学総合図書館蔵。

❖ 투고일 : 2011.12.31
❖ 심사일 : 2012.01.27
❖ 심사완료일 : 2012.02.02

교보문고 KYOBO Book Centre